いま！ベトナムが熱い

ベトナム人の原点を見る

ベトナムは1975年に南北が統一された社会主義共和国だ。国土は約32万㎢で日本の約90％。人口は約8400万人。ベトナムは国家が公認している53の少数民族が存在している多民族国家で、国民は民族籍を持ち、宗教はほとんどが仏教徒（大乗仏教）だ。

7月1～6日の6日間、ベトナム南部のホーチミン市を訪問した。ベトナム戦争の終結前まではホーチミン市は「サイゴン」と呼ばれていた。ベトナム最大の商業都市だ。人口は約620万人。南北に長いベトナムは北部と南部では気候が異なり、南部は典型的な熱帯モンスーン気候に属し、年間平均気温は22度を超える。

現在は雨季の真っ最中で、記者も「マンゴーシャワー」と呼ばれる集中豪雨を味わった。雨の後は涼しく感じるが、下水設備が良好ではないので、雨の後は水が引くまで無駄となる点が印象に残った。

日本人にとっては決して暮らしやすい環境とは感じられない。ホーチミン市1区に最大規模のベンタイ市場がある。初めて訪問した者にとっては人々の熱気に圧倒される。食材をはじめ衣料品や雑貨品まで、生活に必要な素材がそろい、活気に満ちている。その一方で路上にある屋台料理で食べる食事は風情と生活の知恵がある。いすの高さは約20㎝。一見子供のいすかと思うが、熱帯地帯ではこの20㎝が最も暑さを凌げる位置という。暑さ対策の知恵なのだ。ホーチミン市では一般家庭に冷房機がないので、夜遅くまで路上で涼む習慣がある。こうした幾つかの生活の知恵に駐在社会の日本にはないたくましさを感じた。

急がれる交通網整備

3人に1人オートバイ使用 交通事故は1日約50人死亡

ホーチミン市には路線バスが走っているが、3人に1人の割合でオートバイを使用している。

初めてホーチミン市を訪れた日本人には、その交通マナーは劣悪に感じられるはずだ。

例えば、交差点では信号無視が日常茶飯事で、逆走行あり、夕方の無灯火走行あり、極めつけが3人乗りや4人乗りと驚くばかりだ。さらに交差点内では進入車両同士が絡みつきこと入り、裏り合いの精神は感じられない。一般的に開放的で個人主義と言われる南部人の気質も関係しているのかもしれない。この状況で交通事故が起こらないほうが不思議だ。1日約50人死亡していると言われる。日本では昨年の交通事故死者が約6千人と減少傾向にあるが、ベトナムの年間交通事故死者数は1万8千人を超える計算だ。実際に乗用車に同乗していても常にオートバイのホーンが鳴り響き、恐怖を感じた。

交通道徳の教育が急務

自動車関連の複合センター オートキングダムが建設へ

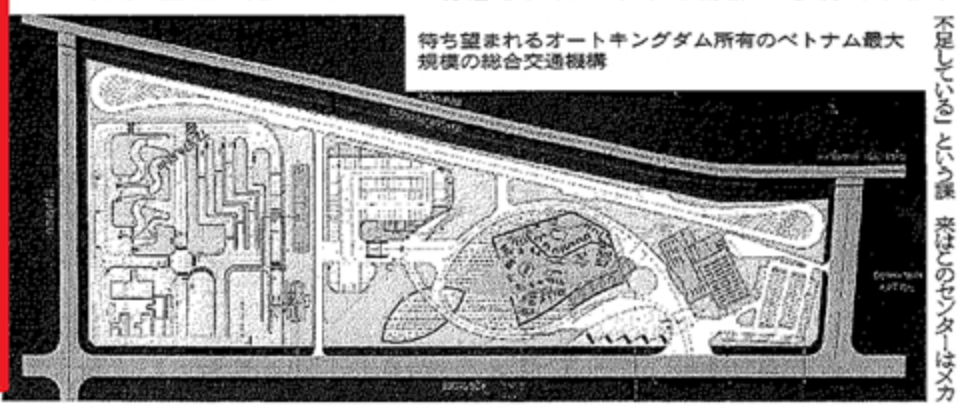
ベトナムは国際運転免許証の条約に加盟していないため、外国人が運転することはできない。公共交通網は不便なため、観光やビジネスで市内を行動する際には、運転手付きのレンタカーを利用するのが一般的だ。

こうしたベトナムにも2006年にホンダがシンガポールから輸入車の販売を開始したことを皮切りに、自動車の急速な普及が始まり、交通環境を変えようという動きも顕在化しつつある。

ホーチミン市・ビンズオン省の最大企業であるダイナングループは、インフラ建設開発をはじめ、工業団地の建設や文化・歴史の遺跡地の建設を手掛ける多角経営の企業体だ。このグループが所有するソンタン工業団地に、グループ企業のオートキングダムが7万7千㎡の敷地を利用して自動車関連の複合センターを建設する。同センターは運転教習所、運転試験場、免許証の発行、乗用車の修理とメンテナンス、輸入車の総合展示場などが整備される予定だ。

オートキングダムのホアン・アン・ツアン広報責任者は「ホーチミン市内はもとより、ベトナム国内でも初めての大規模な複合センターが建設される。同センターはクルマ好きな人のために免許証の取得からクルマの購入に至るまで一括完備される。また当社独自の中古車認定基準を設け、中古車対策は完璧に行う。ドレスアップをやる人には来春オープンするアクセサリー展示場が開設される。アフター面では近代的な機器類を整え、現在約200人のメカニックが特訓を受けている」と説明。しかし、「教習所で生徒に教える教官が不足している」という課題も明らかにした。

最後に同氏は「近い将来はこのセンターはメカニックのために高度な技術を養成し、かつ独自の検定基準を設けて、日本のような能力基準を満たすようにしたい。そのためにアースベトナム社に お願いしているのが技術者の教育だ。またベトナム全土に交通ルールの重要性と人命の尊さを啓発できるセンターを設けたい」と展望を語った。



待ち望まれるオートキングダム所有のベトナム最大規模の総合交通機構

「クルマ社会」到来の予感

難題は税金の重さと変更

ベトナム全土には、地元のメーカーと輸入車の販売店が約15ブランド存在する。ホーチミン市のディーラーを訪問した際、車両価格の表示が米ドルだったことが印象に残った。ベトナムの通貨はドンだが、換算表示はない。自動車の購入対象が一般庶民ではなく、一部の高所得層に限られているひとつの証と言えよう。

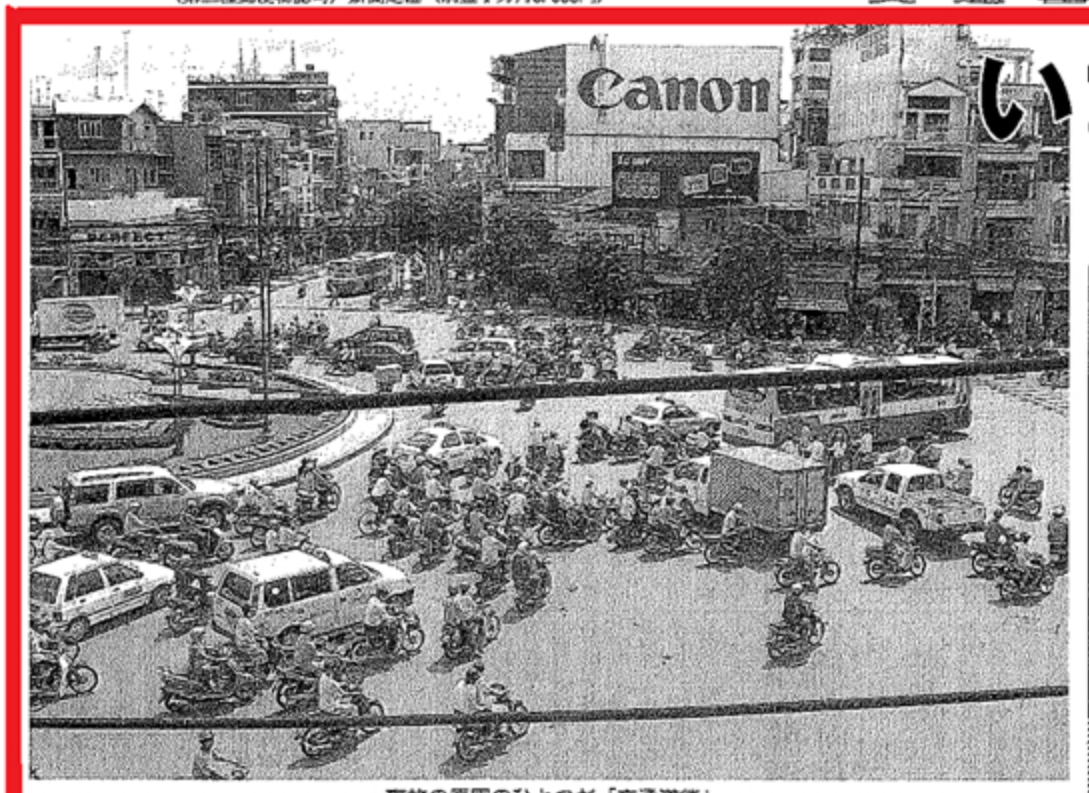
一般への普及を阻害している要因として、税金の高さが挙げられる。ベトナムでは①特別消費税②消費税③登録税という3つの税制が導入されており、日本の9種類に及ぶ道路特定財源以上に重い。

特に際立つのが特別消費税だ。これは高所数に設定される税率で、税率が突然変更されるので、ユーザーをはじめディーラーも絶えず対応に追われているという。ベトナムはインフレや通貨、貿易などの問題を抱えており、日本ディーラーも税率の変動は予測がつかないので、販売のタイミングが難しいと考えていた。

整備業務やカーアクセサリーの製造販売

アース電機がベトナム進出

現地法人「アースベトナム」を設立



事故の原因のひとつが「交通道徳」

発展途上、希望の持てる国

アースベトナム事務所の入り口に勢ぞろいしたスタッフ

アースベトナムの小泉卓弥社長

それでもベトナム市場からも多くの企業が進出の成長性に期待し、日本を図っている。その一例が、アース電機（小泉信太郎社長）だ。

メルセデス・ベンツ日本の新車整備業務を手がける一方で、カーアクセサリーの製造販売を行っている同社は、企業方針のひとつに外国市場の育成を掲げている。その方針に沿って、社内でインド案とベトナム案が議論されたとき、経済雑誌に掲載されたベトナム特集に感銘を受け、ベトナム案に決定したという。

その後、04年にベトナムを視察し、07年2月にベトナムの首都ハノイでライセンスを取得、ホーチミン市に本社業務の活動拠点を設けた。

小泉信太郎社長は、「ベトナムは人類本来の生活力を備えた、希望の持てる国だ」と述べ、特にホーチミン市民の生活力に共感している。

現地法人「アースベトナム」の社長に着任した小泉卓弥社長も「日本社会が成熟すると同時に失った心がある。しかし、ベトナムは発展途上にあり、幾度の戦争と占領下に立ち向かった国、市民は貧しくても生き延びていく手段は心得ている。この国民性とやる気のある労働力は近い将来、中国やインドに匹敵するようになるだろう。アースベトナムは現地での投資ライセンスを取得したことで、地元の企業からも信用された」と語る。

アースベトナムはバッテリーの販売とカーオーディオ（パナソニックとアルパインの総輸入販売代理店）の販売を主な業務とし、自動車修理や特殊車両の製造を手掛ける企業体としてスタート。現在CDやDVDの販売店ショップ2カ所を開設し、カーデーラーにはアンテナショップとして特設展示コーナーを併設している。今期の売上高目標は約1億円。

アフター市場も急成長中

音響の世界に注目

ベトナムでは貧富の格差がまだ大きいが、自動車を購入する層は確実に広がっている。これに伴い、アフターマーケットへの注目度も高まっているようだ。

アースベトナムは中流階級の若者をはじめ、クルマ好きの若者に、音響の世界を満喫してもらうために販売網拡充に着手している。同社販売代理店のPHオーディオショップのフー・アン社長は、会員数約4万人の地元クラブ「オートサイゴンクラブ」の幹事を務め、その仲間からオーディオの相談も受けるという。自らも愛車にオーディオを組み付け、音響を楽しむ実行派で「売り上げは月約60台をキープしている」と豪語する。

また、別の代理店、オウミショップのディエウ・フェ・ギ支店長は「7月末にアルパイン専門ショールームを開設し、ベトナム一番の売り上げが目標だ」と意気込む。オウミはフィルム、オーディオ、シートを主力に販売してきたが、「アルパインは品質、保証、音響が良く、市内で知名度が年々高まり、販売に活路を見出した」と専門店化の狙いを強調していた。

このほかグッドイヤーのタイヤショップのホン・クーン社長は「オートケアー1号店を開業するとともに同時にアルパイン製品を陳列することになった。タイヤショップはアルミホイールとの販売が主流になっているが、他店との差別化を図る意味で、今回アルパインのオーディオを取り扱うことになった。購入者の大半がオリジナル性を重んじる人で、当店はそういう人にアドバイスをしながら自己主張を満喫してもらうように心掛けている」と、アフターマーケットの店舗にも差別化が求められはじめているとの考えを示した。

アースベトナムの小泉卓弥社長は、これら代理店をサポートすることで、「ベトナムに事務所を開設して時間は浅いが、日本人が失いかけている家族制度の温もりや思いやり、先輩を敬う気持ち、働くことへの大切さなどを感じる国。本社の経営理念である『人づくりのための寺小屋精神』をこの地に根付かせるように努力したい。勤勉なベトナム人は『技術』の取得に貪欲的で、この勤勉さが今後起り得る日本国内の技術者の不足を解決する手段に結びつくものと期待している」と抱負を語った。

（文・写真＝青柳正一交通毎日新聞社取締役総合企画本部長）

いすゞショールームにアルパインコーナーを併設し注目されている

車両価格は米ドル表示!? ベトナムの社会情勢

タイヤショップ

「ドライバーに自己主張を大切に良い商品を提供する」とオートケアー1号店（ホン・クーン社長）

オウミショップ

「アルパイン専用ショールームを開設し、ベトナムナンバーワンの売り上げを目指す」（ディエウ・フェ・ギ支店長）

オーディオショップ

PHオーディオショップのフー・アン社長はオートサイゴンクラブの幹事を務め愛車にオーディオを組み付ける実行派は人望があつい